浴室の雪

saolipooh

浴室の雪

ある美しい三兄妹が、罪を犯して、その母によって浴室に閉じ込められた。
それぞれの手に手錠をはめられ、年の順に並んでつながれ、一番上の長男の手錠の一つは、浴室の水道の蛇口につながれた。その家に、一人のホームレスが忍び込んだ。昔、働いていた工事現場で使っていたツナギの制服一着しか持っておらず、その一着を傷と汚れだらけでボロボロにさせていた。まだ２０代後半なのに、職を失い、家もなく、その日暮らしをしていた。あまりにも寒い日だったので、空き家だと思ったその家に忍び込んだのである。そして、美しい三兄妹を見つけた。
　長男は、１０歳前後であろう。黒髪で、恐ろしく白い肌に、アーモンド形の目のなかは、ほとんど黒目で占められていて、悲しんでいるのか、怯えているのかさえ、表情を読み取ることができなかった。妹二人のうち、長女は、長男と次女に挟まれていた。長女も黒髪で胸ほどまで伸ばし、ほとんど青いほどの透き通った肌をしていたが、瞳は兄と違って青く、６歳になるかどうかといった歳だろうが、その体に肉はほとんどついていなかった。その細い両腕にはめた手錠が、痛々しく兄妹につながれていた。末っ子の次女だけが、片方の腕が自由であったが、狭い浴室の中では、何の役にも立たなかった。末っ子は、まだ３歳ぐらいの小さな女の子で、兄や姉とは雰囲気を違えた。おそらく、金髪でパーマをかけたようなくりくりとしたショートヘアや、まるまるとした体型が、その印象を与えるようだが、陶器のように白い肌が兄妹の証となって光っている。若いホームレスの男は、物音がする浴室のドアを開けて、この三人の兄妹を発見したときには、大きな人形が三体、置いてあったかのように錯覚した。しかし、彼らは瞬きをし、息をするため、肩をかすかに上下させていた。三人とも、ホームレスが浴室の扉を開けて姿を見せたことに、少なからず驚いたようで、合計６つの瞼を大きく見開いて、ホームレスを見ていたが、しかし、言葉は一つも発しなかった。
　その出来事が、兄妹たちの母の怒りをかった。彼らの母は、神だったので、誰にも姿を見せることなく、彼女の意のままに万物を動かすことができた。
　突然、浴室の天井が剥がれて見えなくなった。外は、それが夜であるならば、夜にしては明るかった。もしも、昼であったならば、昼にしては暗かった。雪が降っていたからだ。灰色の雲が厚く空を覆い、空は紫色にかすんでいた。外の明かりを吸収し、薄暗くさせた。白い雪が風に乗って、ちらちらと舞った。すると、風が強く吹き、ホームレスの男の体を浴室に押しやった。浴室でバランスを崩し、倒そうになった彼の体を、三人の兄妹は手錠でつながれている両腕で支え、そして、彼の体を空の浴槽の中へと沈めた。灰色の雲から、雪が次々と降り注ぐ。ホームレスの男は、もはや意識を失っていた。腕と足を折って、縮こまって浴槽に埋まる彼の体に雪が降る。はじめは、彼の服や体に触れると溶けていった雪が、塊となって、彼の体に降り積もっていった。三兄妹たちは、ホームレスを見つけたのと同じ目で、その空を見上げている。昼にしては暗く、夜にしては明るい空が、静かに彼らの浴室を覆っていた。

　ある日、とある一軒家から４体の遺体が発見された。３つは子供のもので、１つは成年男性のものだった。浴室いっぱいに、なぜか雪が隙間なく詰まっており、雪をかきだしてみると、そのなかに４体の遺体があったのである。警察は、この件は事故ではなく他殺であろうと疑いを持ったが、いったい、なぜ、どうやって、なんのために犯人が、このような犯罪にいたったのか、推測を立てることさえ困難だった。そのため、この件は、迷宮入りとなった。

おわり